

訪日外国人の消費は「一大産業」

豊澤 幸平

長女の家族がコロナ期間中に三島に転居、私は月に一回程度、新幹線で新横浜と三島を往復している。夕刻の帰りの新幹線で小田原駅からかなりの数の外国人がどっと乗車、その数は以前より増加している。箱根登山鉄道で箱根周辺に行った帰りであると思われる。

昨年の訪日外国人観光客数は二千五百万人、その旅行消費額は約五兆円である。訪日観光客数は二〇年前は五百万人、十年前は一千万人であるので、十年毎に倍々である。政府は二〇三〇年には六千万人を掲げているが、現在の一人当たりの消費額が二十万円そのまま推移しても二〇三〇年には十二兆円の外貨を稼ぐ「一大産業」、しかも成長産業である。日本の現在の貿易赤字額は五〜十兆円であるので、訪日観光客の消費で貿易赤字を帳消しにすることも可能である。輸出額でこれを上回る産業は、輸送用機器（自動車等）だけで、電気機器、機械、化学は及ばない。一方、日本からのアウトバウンド観光客は五〇万人、一二〇〇億円で、観光では圧倒的黒字である。

観光立国の重要な条件は、自然、気候、文化、食といわれており、日本はそれらの条件を備えている。各国の観光客受け入れ数は、フランス九千万人、スペイン八千万人、米国八千万人、中国七千万人、イタリア七千万人がトップファイブ、日本は十位前後である。日本は上位国に劣らない観光資源を持つが、その潜在力を生かしきれていない。

今後の受け入れの課題は、観光地の人手不足、リピーター客や欧米からの客数の拡大、五つ星ホテルの拡充、長期滞在客の受け入れ態勢、マーケティング、ブランディング等である。因みに五つ星ホテル概数は、米国八〇〇、欧米各国一〇〇、タイ一〇〇、日本四〇である。

さらにオーバーツーリズムの解決も必須であるが、とりわけ重要なことは、日本人が受け入れについて積極的になることである。日本は素晴らしい国、この素晴らしい日本を楽しんでもらいたいと心底思わないと、いずれ頭打ちになる恐れがある。

(二〇二四年四月)